

# 日本の戦争プロパガンダとジェンダー

— 『写真週報』の「大東亜共栄圏」「鬼畜米英」表象を中心に

加 納 実紀代

はじめに

第2次世界大戦は、連合54カ国対日独伊枢軸3カ国の間で戦われた。この戦いは、連合側から見れば全体主義に対する自由主義の戦いだったが、枢軸の一角を占める日本にとっては、欧米の植民地支配からアジアを解放する正義の戦争、「聖戦」だった。それは物質主義・個人主義を柱とする西洋の近代の超克という〈価値〉の戦いであり、西洋対東洋、白人(アングロサクソン)対有色人種の戦いでもあった。その勝利によって誕生するのが「和」の精神に満ちた「大東亜共栄圏」である。

こうした「聖戦」イデオロギーは、さまざまなメディアを通じて日本の内外に流布されたが、そのとき規範的役割を果たしたのが政府発行の写真週刊誌『写真週報』である。日中戦争のさなかの1938年2月に創刊され、敗戦直前の45年7月まで計370冊が刊行されたが、そこにはヨーロッパでの戦争勃発を背景に日独伊枢軸陣営の結成、対米英宣戦布告から全面的世界戦争へという流れが刻々の〈現在〉として刻印されているだけでなく、写真という視覚表象によって〈価値〉としての「大東亜共栄圏」が可視化されている。またその〈価値〉にとって、〈敵〉はだれか、〈味方〉はだれかも具象化されている。

そこには明らかにジェンダー・ポリティックスが作動している。とりわけ表紙に見られる「大東亜共栄圏」表象には歴然たるジェンダーがある。また〈敵〉の表象にも、ジェンダーは不可欠のものとしてある。〈敵〉は最終的には「鬼畜米英」に帰結するが、その「鬼畜」性を表象する上でジェンダーが使われているのだ。

本報告では、日本における戦争プロパガンダ政策と『写真週報』の性格を概観した上で、その表紙を中心に「大東亜共栄圏」とそれに敵対する「鬼畜米英」の表象を検証し、そこに働くジェンダー・ポリティックスを解読する。

## 1. 総力戦と戦争プロパガンダ

これからの戦争はたんなる武力の戦いではない、その国の経済力や国民の精神力を総合した総力戦である。こうした「新しい戦争」認識は、日本においても第1次世界大戦後、軍関係者の間に急速に広まった。その中で、思想戦・宣伝戦の重要性が叫ばれるようになって

たが、具体的動きが政府レベルで出てくるのは、1931年9月の「満州事変」以後である。

そのための機関として、1932年9月、「各省申し合せ」による情報委員会が外務省内に設けられたが、以後の動きを主導したのは陸軍である。34年10月、陸軍省は『国防の本義と其強化の提唱』、通称『陸軍パンフ』を出し、「思想宣伝戦は刃に血塗らずして対手を圧倒し、国家を崩壊し、敵軍を壊滅せしむる戦争方式である」として、武力戦・経済戦・外交戦と並んで思想宣伝戦の重要性を強調した。第1次世界大戦におけるドイツの敗北は英仏の宣伝に圧倒されたためであり、「満州事変」に対する国際的非難は「我が宣伝の拙劣なりし為」という。もちろん国内的な「精神統制すなわち思想戦」も重視される。「正義の維持遂行に対する熱烈なる意識と、必勝の信念」をもった国民づくりである。『陸軍パンフ』ではそのための中枢機関として「宣伝省又は情報局のごとき国家機関」の設置が提起されていた。

36年7月、その具体化として官制による情報委員会が内閣に設置された。それは日中全面戦争が開始された直後の37年9月、内閣情報部となり、40年12月には情報局に格上げされる。そこから国家のプロパガンダ・メディアとして発刊されたのが『週報』（1936年10月14日創刊）であり、『写真週報』（38年2月16日創刊）である。

## 2. 『写真週報』というメディア

『写真週報』はその名の通り、週刊のグラフ雑誌である。通常A4判、20～24ページ（グラビア12～16ページ、活版8ページ）だが、315号（44年4月5日）から364/365合併号（45年3月28日）までは、A3判8ページで刊行されている。終刊は45年7月11日付けの374/375合併号。合併号が5回あるので、刊行されたのは計370冊となる。

刊行目的は、情報局によれば、「カメラを通じて国策をわかりやすく国民に知らせよう」ということで、「週報が官報に次ぐ政府の発表機関の要素を多分に有するのに引き換え、写真週報は多分に国民啓発的要素を持ち、且つ直接に大衆に喰ひ入らうとするものである点は、大きな相違点である。写真といふ大衆に親しみやすく、また感情を引きつけやすい宣伝媒体を武器に、文字と相まって国策をわかりやすく理解させ、時局常識を植えつけることを主眼に置いている」<sup>(1)</sup>。「上意下達」的な『週報』に対して、『写真週報』は内発的同調を引き出すことを目的としたわけだ。「創刊の言葉」は高らかに「写真報国」をうたっている。

「最近文章報国、音楽報国などといふ言葉があります。これらと同じ意味に於て写真報国といふことが当然考へられるべきです。（略）」

私等は写真による啓発宣伝の極めて強力なるを想ひ、写真関係のものが、官庁も民間も、作家団体も個人の工房もあらゆるものが動員されて、カメラに依りレンズを通じて対外、対内の啓発宣伝に資し、写真報国の実が挙ることを希望してやまぬ次第です。（創刊号38年2月16日）

写真撮影は、38年7月、「対内外写真宣伝の官庁代行機関」として設立された財団法人写真協会に委嘱した。テーマによっては地方庁や地方新聞社、陸軍情報部、満州国通信社、台湾総督府などの写真もある。表紙写真には名のある写真家のものもある。創刊号は木村伊兵衛の「愛国行進曲」をうたう少年少女の写真、17号は土門拳による看護師のクローズアップである。他に梅本忠男（79号）、林忠彦（136号）も表紙を撮っている。林は『写真週報』でプロデビューした。

読者からの応募写真もある。その募集の言葉がすさまじい。「映画を宣伝戦の機関銃とするならば、写真は短刀よく人の心に直入する銃剣でもあり、何十何百万と印刷されて散布される毒瓦斯でもある。」（2号 38年2月23日）

部数については、20万から50万と幅がある<sup>(2)</sup>。「情報局ノ組織ト機能」によれば、41年3月段階で『週報』60万に対して『写真週報』は約20万、「グラフ誌で最も多いアサヒ・グラフでも数万にすぎないといはれるから、写真週報が断然東洋一」<sup>(3)</sup>という。41年12月8日のアジア太平洋戦争<sup>(4)</sup>開戦以後、30万余に増えたものの需要に追いつけず、1冊を数人で回覧するよう呼びかけている<sup>(5)</sup>。41年7月の「読者調査」によれば、1冊の『写真週報』の読者数は平均10.6人。だとすれば発行部数30万に対して、読者は300万余ということになる。

読者対象は銃後の国民だが、慰問袋に入れることを奨励しており、前線の兵士が読むことも想定されている。読者の男女別は男62%、女38%。学歴は小学校卒業程度が61.8%を占め、高等専門学校以上は7.8%にすぎない<sup>(6)</sup>。定価は10銭。1944年段階ではがき1枚3銭だったから、現在の150円ぐらいだろうか。

### 3. 表紙にみるジェンダーとエスニシティ

表紙は雑誌の顔といわれる。そこには雑誌の性格や読者にアピールしたいことが象徴的にあらわされている。『写真週報』の表紙をみて、すぐ気がつくのは人物写真の多さである。全370冊のうち291冊、8割近くが人物写真で構成されている。日本のグラフジャーナリズムの創始者・名取洋之助が「あらゆる写真のなかで、人物写真がもっとも反応を起しやすく、そのなかでも、顔の写真が強力だ」<sup>(7)</sup>というように、国民の内発的同調をうながすためには人物写真が有効という判断によるものだろう。

表紙の人物写真には日本人だけでなく、同盟国や敵国、「大東亜共栄圏」の男女も数多く使われている。そのジェンダーとエスニシティは表1の通りである。男女がともに写っている写真や子ども、街頭スナップ的な群衆写真もあるが、多くはジェンダーがはっきりしている。戦争プロパガンダ・メディアである以上とうぜん男性優位で、男性だけの写真182回に対して女性は90回。日本人についてみれば、男を100とした場合、女は1938年47、39年69、40年68、41年56、42年10、43年30、44年50、45年60という割合になる。戦線が膠着し

ていた39、40年は女性の登場が多く、アジア太平洋戦争開戦によって一気に戦線拡大した42年は男が圧倒的、そして敗色とともに女の登場が増えている。

エスニシティについてみれば、ヨーロッパ人の場合は男女とも同盟国のドイツ中心。アジアの場合、女性は日本女性とのツーショットを加えると16回。表2に見られるように、中国女性が内蒙古・満州を含めると10回と大半を占めている。男性は23回だが、アジア太平洋戦争開戦後は東南アジアの男性が増える。とりわけ1943年には、アジア諸国の男性リーダーが8回も登場している。

#### 4. <理念>としての「大東亜共栄圏」

『写真週報』表紙におけるアジア人男女の表象は、ともに日本の戦争が強権支配のためではなく、欧米支配からの解放と<和>に満ちた「大東亜共栄圏」づくりのためであることをアピールしているといえる。

まず女性像を見てみよう。写真1～6に見られるように、彼女たちはいずれも笑顔をみせている。しかも写真2

は日の丸(80号)、3は日本人形(109号)を持ち、5ではインドとマライ人の少女が日本の着物を着てバンザイしている(268号)。いずれも日本への<親愛>と<受容>をアピールするものだ。とりわけ写真1の女性は、巻末の解説によれば「南京中山陵の姑娘」だが、表紙には「日本の懐に抱かれて」と書かれている(56号 1939年3月15日)。いうまでもなく南京は、37年12月の占領に当たって日本軍兵士による虐殺・レイプ事件が多発した所である。その南京の女性が「日本の懐に抱かれて」笑顔をみせているというわけだ。

それに対して男性は「大東亜共栄圏」の理念、<解放>と<平等>を表象しているとい

表1 『写真週報』表紙人物の男女別点数

発行年	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	計	
全点数	45	51	52	53	51	50	49	19	370	
女性	日本女性	8	9	10	7	3	6	13	6	62
	日本母と子		2	1	2		1			6
	アジア女性	2	4	3	1	1	1	1		13
	ヨーロッパ女性	1	1	2	1					5
	日本とアジア女性 日独伊		1	1		1				3
計	11	17	18	11	5	8	14	6	90	
男性	日本男性	15	16	16	16	29	23	26	10	151
	日本父と子	2								2
	アジア男性	1	3	3	3	4	8	1		23
	ヨーロッパ男性		2	1		1	1			5
	日独伊				1					1
計	18	21	20	20	34	32	27	10	182	
日本女性指数% (日本男性=100)	47	69	68	56	10	30	50	60	44	
男女子ども	日本人子ども	1			2	2		1	1	7
	日本人男女	1	1		1	1	2			6
	アジア男女		1	2	1		2			6
合計	31	40	40	35	42	44	42	17	291	

表2 『写真週報』表紙にみる「大東亜共栄圏」のジェンダー(数字は号数)

年	女性	男性	男女・群衆	
1938	盛装の内蒙古女性	20	盛装した台湾蛮士の頭目	41
	満州国大使のお嬢さん	31		
1939	鳩笛を持つ北京の少女	46	カナカの青年	59
	北京での日本と中国の娘	47	日滿技術工養成所の少年	64
	南京中山陵の姑娘	56	日本で修行中の支那僧	70
	廈門の姑娘	73		
	半島にひらめく日の丸	80		
1940	日本人形を持つ小姐	109	南京の卵売り少年	98
	北京郊外の姑娘	115	王精衛	107
	鷓鴣号と内鮮二少女	131	麦を運ぶ半島少年	124
	ハノイの花売娘	134		123
1941	中国の元巨風景	149	新国民政府初代大使	156
			満州協和会少年団員	157
			満州国務大臣・張景惠	185
1942	中華映画女優	216	タイ・ビアン首相	226
	ジョホール日本人看護婦		インド砲兵隊	234
	とマライ少女	230	スマトラ武道	247
			中国軍の猛訓練	248
		昭南原住民の訓練	250	
1943	振り袖姿のマライ娘とインド娘	248	風拂げする中国少年	254
			ビルマ防衛軍兵士	259
			ビルマ・パーモ長官	265
			フィリピンホルヘ・バルガス長官	272
			ビルマ・オンサン国防相	286
			フィリピン・ラウレル大統領	295
		チャンドラ・ボース	298	
1944	北ボルネオの女性	350	チャンドラ・ボース	309
			昭南の人々	258
			マニラの感激	
			在京支那小学生	263
			昭南の子ども	281



写真1 56号  
南京中山陵の姑娘



写真2 80号  
半島にひらめく日の丸



写真3 109号  
日本人形を持つ少姐



写真4 115号  
北京郊外の姑娘



写真5 268号  
振り袖姿のマライ娘とインド娘



写真6 350号  
北ボルネオの女性

える。日中戦争の段階から、日本国内では「東洋平和のため」、「東亜新秩序建設」といった言葉で「聖戦」性が謳われていたが、「大東亜共栄圏」という言葉が公的に登場するのは、アジア太平洋戦争直前の1941年7月2日、御前会議においてである。ここで南進路線にもとづく「情勢ノ推移ニ伴フ帝国国策要項」を決定し、「大東亜共栄圏の建設」、「自存自衛の基礎を確立する」ことを謳っている。

「大東亜戦争」と呼ばれたアジア太平洋戦争開戦以後、「大東亜共栄圏」は日本の「聖戦」性を担保するスローガンとして大々的に打ち出された。それが頂点に達するのが1943年11月5、6日、東京に「大東亜共栄圏」の指導者を集めて開催された大東亜会議である。ここで

採択された「大東亜共同宣言」には、「大東亜ヲ米英ノ桎梏ヨリ解放」、「道義ニ基ク共存共栄」、「自主独立ヲ尊重」といった言葉がちりばめられている。出席者は汪精衛(中国国民政府行政院長)、張景恵(満州国國務総理)、ワン・ワイタヤコン(タイ首相代理)、チャンドラ・ボース(自由インド仮政府首班)、ラウレル(フィリピン大統領)、バー・モ(ビルマ首相)である。

『写真週報』の表紙にアジアの男性指導者が多用されるのは、こうした<理念>としての「大東亜共栄圏」の可視化といえる。表2に見られるように、アジア人男性23回のうち、10回(9人)はこうした指導者である。これを日本人指導者の表象と比べてみると、「大東亜共同宣言」にある「解放」と「自主独立」、「共存共栄」が浮かび上がってくる。まず



写真7 185号  
満州国務大臣・張景恵



写真8 298号  
チャンドラ・ボース



写真9 295号  
フィリピン ラウレル大統領



写真10 179号  
近衛首相



写真11 233号  
阿部翼賛政治会会長



写真12 249号  
東条首相

量的にみれば、日本男性は151回取り上げられているが、うち指導者は8人10回に過ぎない。被支配地域における指導者比率の高さがわかるが、それは権威ある存在としての位置づけを示すものに他ならない。表象の仕方についても、写真7～9に見られる被支配地リーダーと10～12の日本人指導者の間に差は全くないといえる。つまり「大東亜共栄圏」各国は、日本によって欧米の植民地支配から「解放」され、「自主独立」の保証のもとに「共存共栄」できるというわけである。

## 5. <敵>の表象

それでは、こうした輝かしい「大東亜共栄圏」の<理念>に対立・敵対する<敵>は、どのように表象されているだろうか。

「大東亜共栄圏」が人物写真で表象されるのに対し、<敵>の人物写真は『写真週報』表紙にはきわめて少ない。とくにリーダーは、日中戦争の段階で35号(1938年10月19日)に張り子の蒋介石(写真13)



写真13 35号  
張り子の蒋介石



写真14 126号  
天津のイギリス少女



写真15 205号  
破壊された香港要塞砲



写真16 218号  
落ちた星条旗



写真17 235号  
イギリス人俘虜



敗戦の光  
物産はす  
「この戦場の  
ついでに、  
ついでに、  
ついでに」  
【大分】  
北原の光

二連 崎石 行死決兵空就カリメア



マンガ1、2 217号、220号  
敗残の兵物を選ばず  
アメリカ航空兵決死行



「わたしは米英  
追放  
影浦 命雄  
「サウイト屋敷さん  
わたしの米英追放の  
カスを取っ替わすわ」  
「わつしも勝たは」

マンガ3 217号  
私の米英追放



「夫の聲」遠  
方より来る  
南 義郎  
日本からの放送  
です。ふだん正  
確なニュースが  
入るのでナイト  
クラブでも大へ  
んな人気だ。今  
夜は播講の放送  
がはじまりました  
た。アラ、うち  
の人の聲だわ可  
哀想に、ろくで  
もない職争なん  
かしてさ、ルー  
ズグハルトの氣  
狂ひめ」

マンガ4 223号  
「夫の聲」遠方より来る



男々しくと女々しく  
小 泉 葉 郎  
「あなた、間違つても「ズグハルト  
」のためなかに死んぢやいやよ」

マンガ5 236号  
男々しさと女々しさ



「鬼畜米英  
行 左 戸 央  
鬼畜の野蠻  
は世界のすべて  
に及ぶ。その  
のみならず、  
ソソクを食料を  
食料のためにし  
めようとする  
にも鬼畜は勝  
つのである」

マンガ6、7 294号  
鬼畜米英



「鬼畜の野蠻  
約米英野蠻も勿論はもつから反古とせ、  
勝つてまいけさへ戦へばいいのだ」



が登場する以外には見あたらない。写真14、17のように少女や捕虜でく無力感を表象するか、15の破壊されたイギリス要塞砲、16の地に落ちた星条旗のように、象徴的なくもの>でく敗北>をみせるにとどまっている。ここには表紙の持つポリティクスが働いている。読者の嫌悪感をかき立てる醜悪なものや残虐性、むき出しのネガティブ・キャンペーンは表紙には忌避されるということだ。これは『写真週報』に限らず、現在でもいえることだろう。

しかしだからといって『写真週報』にネガティブなく敵>の表象がないわけではない。アジア太平洋戦争開戦直後に発行された201号(1941年12月31日)より裏表紙にマンガが登場するが、そこでは戦局の推移につれ、<敵>の残虐性、醜悪さがいやというほど表象されるようになる。先に見た写真13~17は初戦の勝利段階のものだが、1942年夏からアメリカが反攻、戦局はジリ貧状況に追い込まれる。この段階での<敵>の表象は、彼らの戦意不足・軟弱さ、退廃・享楽ぶりを焦点化し、国民の忍耐と必勝の信念堅持を呼びかけている。マンガ1「敗残の兵物を選ばず」(217号 42年4月22日)、2「アメリカ航空兵決死行」(220号 42年5月12日)はアメリカ兵の戦意不足・軟弱さを描いているが、3「私の米英追放」(217号 42年4月22日)、4「『夫の声』遠方より来る」(223号 42年6月3日)、5「男々しさと女々しさ」(236号 42年9月2日)に見られるように登場人物が女性化され、アメリカの享楽性と退廃ぶりが表象されることが多くなる。

1943年秋のガダルカナル撤退以後、戦局が急激に敗退過程にはいると、<敵>は「鬼畜米英」に特化され、その残忍さ・醜悪さが強調される。「鬼畜米英」という言葉の初出は、管見によれば『読売報知新聞』1942年10月20日「敵機搭乗員の暴虐処分」という記事中、4月に本土初空襲した米軍機の搭乗員が「幼き者に鬼畜の急降下掃射を行ひ殺傷」したというものだ。『写真週報』では294号(1943年10月20日)のマンガで「鬼畜米英」を特集し



写真18 335号

ている(マンガ6、7)。ここではチャーチル英首相とルーズベルト米大統領がアジア搾取の上に飽食をむさぼっている醜悪な姿が描かれている。

最後の段階では「鬼畜米英」は女性化され、それによっていっそうの残虐性を表象するものとなった。写真18は『写真週報』335号(1944年8月23日)だが、アメリカ女性の机上に日本兵の頭蓋骨がおかれ、「靖国に神鎮りますべきわが殉忠の勇士の聖骨は、一度、鬼畜の手に渡ればいたましくも少女に対する好個の記念品とされる。・・ヤンキーは鬼畜の本性をさらけ出したのだ」とある。

これは『読売報知新聞』(44年8月4日)「見よ米鬼の

残忍“戦線土産”に頭蓋骨」に対応するものだが、この新聞記事では子どもが太平洋戦線従軍中の兄から送られた日本兵の頭蓋骨を弄んだことになっている。他の記事でも同様である。『写真週報』は女性と頭蓋骨の写真をねつ造することによって、アメリカの鬼畜ぶりを際立たせているのだ。ここでは「女性は本質的に優しい」というジェンダーが自明の前提となっている。アメリカ人は、その優しいはずの女性までがかくも残忍だというわけである。



『読売報知新聞』1944年8月4日

### まとめ

もちろん日本のアジア太平洋戦争が「アジア解放の聖戦」であるというのは、プロパガンダにすぎない。結果からみれば、第2次世界大戦後アジア諸国の多くは欧米の植民地支配から解放されたが、日本の主要な戦争目的が東南アジアの資源獲得にあり、欧米になりかわっての支配であったことは明らかである。したがって「自主独立」、「共存共栄」を内容とする「大東亜共栄圏」も、侵略と搾取を隠蔽するスローガンにすぎなかった。また国内的にいても、日本人は被支配地アジア民族と対等・平等ではなく、あくまで「アジアの盟主」、「指導民族」でなければならなかった。日本国民の精神動員にとって、「指導民族」としての「誇り」は不可欠だったからである。

この「大東亜共栄圏」の〈平等性〉と「指導民族」の〈誇り〉との間の矛盾をどう解決するか。そこに作動するのがジェンダー・ポリティックスである。先に見たように、『写真週報』の表紙写真において、日本人リーダーと被支配地リーダーの視覚表象に違いはなかった。それはリーダーではない一般男性においても同じである。日本人男性も被支配地男性も、同じように〈戦う男〉、〈働く男〉として表象されている。しかしジェンダー的には明らかな違いがある。まず日本人男女において、男性が前線で〈戦う男〉、〈働く男〉であるのに対して、女性はあくまで銃後にあり、子供を産み育てる〈産む女〉であり、食料や軍需生産に励む〈働く女〉である。この〈働く女〉は、戦局の拡大で男性労働力が不足するにつれ農業労働から工場労働に移行し、それと同時に女性たちの表情から笑顔は消える。表1にあるように1944年の表紙には11回女性が登場するが、大半は飛行機工場などで働く姿である。彼女たちは男子同様に洋服を着て、決然とした表情で機械に立ち向かっている。男性は洋服、女性は和服という当時のジェンダーからいえば、戦局厳しい時期において、日本女性には〈男性性〉が付与されたといえることができる。

それに対して被支配地女性は、あくまで民族服を着て、〈ほほえむ女〉として表象され

ている。それは「指導民族」としての日本への従属と親愛を示すものにほかならない。つまり「大東亜共栄圏」の〈平等性〉は被支配地男性に、「指導国民」の〈誇り〉は被支配地女性の笑顔によって担保したということだ。エドワード・サイードはその著『オリエンタリズム』において、西洋がオリエント（東洋）に対して〈女性性〉を付与したことを指摘している。それに対して日本は、被支配地民衆をジェンダーによって差異化し、女性に対してのみ〈女性性〉をもとめたことになる。これにはおそらく、〈西洋〉に対しては〈東洋〉、その〈東洋〉においては〈西洋〉的存在として指導的に振る舞ってきた日本近代の特殊性が関わっている。

いずれにしろ、「大東亜共栄圏」の〈平等〉と〈親和〉をあらわす上でも、「鬼畜米英」の〈残虐性〉を表象する上でも、ジェンダー・ポリティクスが不可欠のものとして機能していることはたしかである。それが天皇制国家日本の特殊性なのか、それとも普遍性を持つものかについては次の課題としたい。

（本論は、平成17年度～19年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（B）研究課題番号17310154「表象に見る第2次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」（研究代表者 加納実紀代）の研究の一部である。）

## 註

- (1) 内閣情報局「情報局ノ組織ト機能」1941年
- (2) 櫻本富雄『文化人たちの大東亜戦争』（青木書店、1993）には、「真偽のほどは不明であるが、『写真週報』は一五〇万部発行したといわれている」とあるが、これはオーバーだろう。荻野富士夫は『情報局関係極秘資料』（不二出版復刻、2003）の「解題」において、「最高五〇万部以上に及んだ」と記している。
- (3) 註（1）に同じ
- (4) 1941年12月8日、米英への宣戦布告で始まった戦争は、当時公式に「大東亜戦争」と呼ばれたが、戦後は「太平洋戦争」、最近は「アジア太平洋戦争」と呼ばれる。2005年刊行開始の『岩波講座 アジア・太平洋戦争』では、満州事変以来の中国への侵略戦争も含めた広い概念として使っているが、本論では1941年12月から45年8月までの戦争を指す。
- (5) 1942年4月1日発行の214号の「購読申込について」によれば、「毎週、週報百数万、写真週報三〇万余を配布しておりますから、新規購読の方は最寄りの官報販売所又は取次店にご相談下さい。なほ一冊の写真週報でも、なるべく多くの人に利用されるようにして下さい」とある。
- (6) 「写真週報 一冊を何人で読むでせう 「読者調査」の結果」『写真週報』193号1941年11月5日
- (7) 名取洋之助『写真の読み方』岩波新書 1963年 54ページ